

## 『ラーマヤナ』

『マハーバーラタ』の約 1/4 の分量．全 7 巻（ただし初巻と最終巻は成立が新しい）．洗練された文体．こちらも全てサンスクリット．

終結部：「地上に山河が存続する限り，『ラーマヤナ』の物語は人々に語り続けられるであろう」 プラフマーがその末永き寿命を予言．この予言は的中し，インドのみならず東南アジア，中央アジア，極東にまで影響を与えている（文学作品，造形美術，音楽舞踊）

著者：ヴァールミーキ（インド最初の詩人）実際は東インドに伝わったラーマの物語をもとに，彼が詩的洗練を加えて伝えたもの．AD 2c 頃に原形．

### 主要な登場人物（入門 92）

ラーマ Rāma（ヴィシュヌの化身．主人公．アヨーディヤー国の第一王子）

スィーター Sītā（ラーマの妻．ヒロイン．ヴィデー八国の王女）

ハヌマーン（ハヌマットとも．猿王スグリーヴァの臣下．ラーマに忠誠．助演男優賞に値するはたらき）

ラクシュマナ（ラーマの異母弟．兄のラーマを慕う）

バラタ（ラーマの異母弟．母の策略を嫌う）

ラーヴァナ（ランカー島に住む羅刹の王．とっても悪い奴．ラスボス）

シュールパナカー（魔女．ラーヴァナの妹．スィーター誘拐を嗾ける）

インドラジット（ラーヴァナの息子．強敵．ラクシュマナを射抜く）

プラフマー（ラーヴァナを無敵にしてしまった無責任なおじいさん．その罪滅ぼしのためか，戦いの最後にラーヴァナを倒すことのできる“プラフマーの矢”をラーマに授ける）

### [1] 少年編

修行を積んで神に殺されない保証をプラフマーより得たラーヴァナに神々は苦しまされていた．そこでヴィシュヌはアヨーディヤー国の王子として人間に化身して生まれてきた．異母兄弟（人間）のラクシュマナ（ラーマととても仲よし）やバラタも生まれた．（ヴィシュヌの化身，は後からの付加）

たくましく生長して後，旅の途中でヴィデー八国の王女スィーターの婿選び（スヴァヤンヴァラ）に遭遇し，誰も引けない弓をただ一人引いてスィーターとの結婚を許された．両王家は幸せの絶頂にあった．（入門 93）

### [2] アヨーディヤー編

老齢となったラーマの父（王様）は，王位をラーマに譲ろうとするが，バラタの母（第二王妃）の策略（古い約束を持ち出した）で森へ追放される．ラー

マにはスィーターとラクシュマナが付き従った。父王を嘘つきにしないための決断 (satyavacana)。バラタはそんな母を嫌い、ラーマたちに王として戻ってもらうよう森まで行って頼むが、父の satyavacana を重んじるラーマは申し出を拒絶する。バラタはやむを得ずラーマのサンダルを譲り受け、それを王座に置き、自分はあくまでラーマが戻ってくるまでの代理であるという立場を取り続けた。(謎 110)

### [3] 森林編

ラーヴァナの妹シュールパナカーが森にいるラーマを見初めて言い寄るが、ラーマに拒絶される。そこでシュールパナカーは愛妻スィーターを殺そうとするがラクシュマナに返り討ちにあう。怒りと嫉妬に狂ったシュールパナカーは、兄のラーヴァナにスィーターの誘拐を囁ける。「絶世の美女スィーターはお兄さまにこそ相応しい」そして計略を巡らしてスィーターを誘拐してしまう(入門 96) ラーヴァナはスィーターに言い寄るが、貞淑なスィーターはこれを拒絶。「1年以内にわしを受け入れなければ食ってしまうぞ!!」

### [4] キシュキンダー(猿族の都の名)編

ラーマたちはスィーターを探し回っているうちに、猿王スグリーヴァと出会う。彼はラーマに協力し、スィーター奪還・ラーヴァナ打倒を約束する。特に彼の臣下ハヌマーン(風神ヴァーユの息子で空を飛べる。空気を吸い込んだり吐いたりすることで身体の大きさを自由に変えられる)はラーマにこの上ない忠誠を誓い、この物語の助演男優賞を得たと言ってもよい。彼はスィーターがランカー島に連れ去られているという情報をつかみ、潜入を決意する。(謎 115, 入門 98)

### [5] 美麗編

空を飛んでランカー島に潜入したハヌマーンはスィーターを見つけ、ラーマの指輪を見せて必ず救い出すことを約束する。そして軽く一暴れ。

### [6] 戦闘編

ハヌマーンの報告を聞き、ラーマはランカー島遠征を決意する。猿たちは橋を架ける(アダムズブリッジ, 謎 117)。桃太郎との類似。

インドラをも倒したインドラジットにラーマ軍は苦しまされ、ラクシュマナも射抜かれてしまう(入門 99)。秘密の薬草を得るためにハヌマーンはカイラーサ山へ向うが、どれが薬草か見分けることができなかつたので、カイラーサ山の山頂をもぎ取り戦場まで運んでくる(入門 98)。

何とかインドラジットを倒し、残る敵はラスボスのラーヴァナのみ。しかしラーヴァナは何度首を切り落しても再生してしまうため倒すことができない。途方にくれたラーマの前に、ブラフマーの矢が現れる。この矢でしかラーヴァナを倒すことはできないのだ（バイオハザード）。そしてこの矢でラーヴァナを射て、ついに倒すことができた（入門 100）。

平和が戻ったがスィーターの貞操に疑念を抱く民衆に配慮して、ラーマはスィーターを拒絶する。スィーターは自ら火に飛び込み、自らの潔白を証明する（satyavacana, 謎 119）。こうして全ての事件は解決。ラーマは王位に就き、皆は末永く幸せに暮らしましたとさ。They lived happily ever after。めでたし、めでたし。これで実質上お話はおしまい。

#### [7] 最終編

妻への猜疑心からスィーターを失ってしまう哀れなラーマ。スィーターは土に還り、ラーマもヴィシュヌの姿に戻って天に帰る。ラーマがヴィシュヌの化身であることとつじつまを合わせようとした稚拙な話。後代の付加。構成も韻律もがたがた。評判が非常に悪い。